

田窪 セツ子氏 伸ベ士（整経オペレーター）



田窪セツ子氏



整経はタオルの製織工程のひとつであり、製織する前の準備作業である。この作業の専門家を今治では「伸ベ士」と呼ぶが、現在は「整経オペレーター」という名称が浸透しつつある。整経は、タオルのデザインやクオリティを左右する重要な作業であり、熟練の技を必要とする。「タオルびと」では初となる伸ベ士の田窪セツ子氏をとり上げ、伸ベ士の仕事内容にくわえ、時代に抗うことなく柔軟に前向きに明るく希望をもって生きてきた田窪氏の、タオルとともに歩んだ人生について話をうかがう。

たくほ・せつこ ☆ 1949年10月、愛媛県上浮穴郡柳谷村柳井川（現・久万高原町柳井川）生まれ。1956年4月柳谷村立柳井川小学校に入学。同校を卒業後、1962年4月柳谷村立柳谷中学校に入学。1965年3月に同校を卒業して4月に城南織物（株）へ入社。入社当時から整経の作業に携わる。3年間城南織物で働いたが、母親の介護のためにいったん帰郷。母親の回復を待ってふたたび伸ベ士に復帰し、1969年3月に中忠（株）へ入社。1972年1月結婚を機に同社を退社し、タオルの仕事からしばらく離れるが、1976年6月に縁あって田中産業（株）に入社し現在に至る。

1. 幼少時代

スポーツ万能で、明るく活発な少女時代

田窪セツ子氏は、1949年10月9日、愛媛県上浮穴郡柳谷村柳井川（現・久万高原町柳井川）にて父・西森系馬氏と母・竹雄氏の間で9人兄弟（兄5人、姉3人）の末っ子として生まれた。柳谷村は愛媛県の中予地方に位置し、山に囲まれた自然豊かな場所である。2004年に久万町と面河村と美川村が合併し、現在は久万高原町となっている。この地域は昔から林業が盛んであり、西森家もおもに林業に従事し、その傍ら農業にも携わった。



前列左から四男・国夫氏、五男・正氏、田窪セツ子氏

後列左から祖父・銀太郎氏、三女・レイ子氏、母・竹雄氏、父・系馬氏

「久万林業」の歴史は、明治初期に遡り、和歌山県から菅生山大覚院大宝寺に執事として来住した井部栄範が吉野杉の苗をみずから植林したのが嚆矢とされている（久万高原町 HP）。

その後、植林活動に地域ぐるみで励み、戦後の高度成長期をへて四国でも有数の林業産地となった。林業は力仕事であり、主として男性の仕事だったが、母親は「枝打ち」という樹木の枝をナタや斧、カマなどを使って幹から切り落とす作業を手伝った。この作業は「無節」の木を育て、日当たりを良くして栄養を行き届かせる効果があり、植林には欠かせないものである。林業と農業を兼業し、父親の仕事を手伝いながら9人の子供を育て上げた母親は、たくましく明るい女性であり、「竹雄」という名前だけあって100歳まで生きた。

田窪氏は、1956年4月に柳谷村立柳井川小学校に入学した。田窪氏が入学した1950年代の中頃は児童数が多く、各学年で45人ほどのクラスが2つあり、1学年から6学年を合わせて500人を超える在校生がいた。しかしながら、1960年代には過疎化と少子化が徐々に進み、上記の3校とも学生数は減少していった。そして時をへて、2001年3月に中津小学校が閉校し、つづいて2005年3月に柳井川小学校と西谷小学校が閉校して、同年4月より久万高原町立柳谷小学校として新たなスタートを切り、現在に至っている。



柳谷村立柳井川小学校

（写真掲載許諾：久万高原町立柳谷小学校）

小学校時代の田窪氏は、勉強もスポーツも好きだった。そのなかでも俳句に興味をもちはじめ、歌を詠むようになった。俳句はいまもつづく田窪氏の趣味である。スポーツではバスケットボールをはじめたが、走ることも好きだった。

柳井川小学校を卒業した田窪氏は、1962年4月に柳谷村立柳谷中学校に入学した。同校は、柳谷村立柳井川中学校、西谷中学

校、中津中学校の3校が統合されて1961年4月に創設され、田窪氏は第2期生にあたる。

柳井川小学校と柳谷中学校は隣接しており、小学校時代と同様に片道2時間の道のりを徒歩で通った。往復4時間のうち半分はあまり整備されていない山道であった。往路は午前6時に家を出て、復路は部活終了後の午後5時に学校を出る。秋冬は日が短いため、懐中電灯は通学の定番アイテムだった。そして、この辺りは冬には雪が降り積もるため、長靴も必須アイテムだった。雪が積もった日は父親が開けた道路まで雪かきをしてくれた。田窪氏は、学校の近くに住んでいる友だちを羨ましいとおもったこともあるが、学校の教材や弁当の入った重い荷物を背負って「負けないぞ」という強い気持ちで、9年間一日も休むことなく通学した。この強靱な精神は、しっかり者の母親の影響と通学で育まれた丈夫な身体から醸成されたものである。



東京オリンピック開会式

（写真：東京都提供）

毎日の長い歩みで鍛えられた田窪氏の健脚は、中学校時代のさまざまな場面で発揮された。まず、バスケット部と陸上部に所属し、勉強の傍ら毎日夕方まで部活動に励んだ。学校のマラソン大会では、中学1年生のときに全学年で第2位の成績をおさめた。しばらく1位を独走していたが、最後の最後で3年生に抜かれて悔しい思いをした。

つぎに、1964年10月に開催された東京オリンピックで、先頭を走る「正走

者」のうしろを伴走するひとりに選ばれ、国道33号沿いの約1kmの道のりを走った。全国47都道府県の859市区町村を121日間かけて聖火が運ばれ、走者総数はおよそ10万人を数えた。田窪氏はこのうちのひとりであり、このときの感動をみずから詠んだ一句がある。

若人の手に掲げられ 県境を

小学校の6年間と中学校の3年間は、田窪氏にとって人間形成の場となった。とくに中学校では校長が朝礼の際に、宮沢賢治や島崎藤村などの言葉を引用しながら人生訓を説いた。子供ながらにそれらの言葉は田窪氏のなかに残り、のちの座右の銘となった。そして、校長がいつも口にしていた言葉がある。

己が人生 開拓創造せよ

田窪氏は、卒業のときに校長からこのメッセージとサインが入った色紙をもらった。「己が人生 開拓創造せよ」を胸に、田窪氏は、その後の人生において遭遇するいかなる苦難にも歯を食いしばり前向きにがんばってこられた。

田窪氏に大切な思い出をくれた柳谷中学校では、柳井川小学校とおなじく当時500人くらいの在校生がおり、高度成長期の時代を反映して生徒がたくさんいたが、少子化が早くから進み、生徒数は少しずつ減少していった。そして、2015年3月、最後の卒業生3名を送り出し、惜しまれながら閉校となった。田窪氏は、中学校時代の同級生と定期的に同窓会を開いており、柳谷中学校は閉校してしまっただが、卒業生の結束はいまも固い。

2. 姉を頼って今治へ

伸べ士としてキャリアを積む

柳谷中学校を卒業した田窪氏は、1965年3月に城南織物（株）に入社した（城南織物については「タオルびと」2017年12月号～2018年3月号を参照）。柳谷村から遠く離れた今治のタオルメーカーへの就職を決めたのは、三女のレイ子氏が城南織物で伸べ士としてすでに仕事をしていることが大きい。姉との繋がりで田窪氏も城南織物に入り、女子寮での生活がはじまった。女子寮は工場の近くにあり、当時は6畳ほどの小さな部屋に6人から7人が共同で生活をしてきた。中学を卒業して親元を離れ、それまで16年間一緒に暮らしてきた両親のことが頭をよぎり、田窪氏は寂しくて布団のなかで毎晩泣いていた。同僚に気付かれないように、声をこらして泣いた。寂しいとき、苦しいとき、田窪氏は宮沢賢治の「雨にも負けず」の詩を思い出した。そして、幼少期に片道2時間の道を一日も学校を休むことなく通いつづけたときと同様に、「負けないぞ」と歯を食いしばった。

1960年代のタオルメーカーは、京阪神への就職者の増加や進学率の上昇によって近隣地域の新規女子中卒者の獲得に苦慮するようになり、田窪氏のように遠方の若者を積極的に採用した。そのため、タオルメーカーでは女子寮の設置が不可欠となり、さらに運動場を敷設したり茶道や花道の教室に通わせたり、福利厚生面での充実が図られた。日給は、田窪氏の姉の時代より若干上がり、500円だった。表1は、今治のタオルメーカーにおける新規中卒者の求人数・充足数・充足率である。これをみると、1966年の時点で充足率は29.4%であり、年々この数値は下がっている。1970年に入ると2割を切り、男女とも労働力確保が困難となった様子が窺える。

採用された女性の多くは製織工程に配属されたが、中学校での成績が優秀であった田窪氏は、姉と同様に整経の担当となった。それまでタオルづくりとはまったく縁のない生活をしてきた田窪氏だっ

だが、「負けないぞ」という強い気持ちで一所懸命に整経の作業に必要な技術を頭に叩き込んだ。今治では当時、タオルケットやバスタオルなどの大判の紋織りタオルがたくさん生産されていたが、普通織機や自動織機が使われていたため、1980年代から徐々にあらわれる革新織機に比べると整経の作業はさほど複雑ではなかったと、田窪氏は言う。

表 1 今治のタオルメーカーにおける求人数・充足数・充足率

年	求人数			充足数			充足率(%)		
	男子	女子	合計	男子	女子	合計	男子	女子	合計
1966	216	1,062	1,278	9	366	375	4.1	34.4	29.4
1967	114	1,154	1,268	27	335	362	23.6	29.0	28.5
1968	36	853	889	9	249	258	25.0	29.2	29.0
1969	39	875	914	7	191	198	17.9	21.8	21.7
1970	47	763	810	7	143	150	14.9	18.7	18.5
1971	12	614	626	1	82	83	8.3	13.4	13.3
1972	7	469	476	3	35	38	42.9	7.5	8.0
1973	4	345	349	4	29	33	100.0	8.4	9.5
1974	0	230	230	0	26	26	—	11.3	11.3
1975	1	184	185	1	24	25	100.0	13.0	13.5
1976	26	282	308	2	30	32	7.7	10.6	10.4
1977	10	220	230	2	37	39	20.0	16.8	17.0
1978	8	153	161	0	20	20	0.0	13.1	12.4
1979	92	324	416	41	89	130	44.6	27.5	31.3

出典： 辻悟一『えひめのタオル八十五年史』四国タオル工業組合、1982年、202頁。

城南織物では3年間、伸べ士としてのキャリアを積んだ。仕事以外では、ドレスメーカー女学院に通って洋裁を学び、おもに子供服をつくっていた。城南織物時代には、将来夫となる真行^{まさゆき}氏と出会っていたが、このときは真行氏を含め同僚数人と一緒に食事に行く程度であり、まさか真行氏が「運命の人」とは想像もしなかった。

仕事もプライベートも順調だったが、ある日、母親が体調を崩してしまい、介護の必要から田窪氏は帰郷を決意する。うしろ髪を引かれる思いで城南織物を退社し、柳谷村で母親の介護生活を1年間つづけた。介護の甲斐があって母親は元気になり、自分のこれからを考えたときに「やっぱり今治に行こうかな」とふと田窪氏はおもった。

そして、19歳になった田窪氏は、今治に戻って1969年3月に中忠（株）に再就職した。柳谷村に中忠で働いていた知り合いがあり、その伝手から中忠で世話になることになった。城南織物でのキャリアを生かして中忠でも整経を担当し、1年間のインターバルを挟んで伸べ士に復帰した。中忠の女子寮でも一部屋6人から7人の共同部屋での生活であった。プライベートでは福利厚生の一環として華道を学んだ。

また、城南織物時代に出会った2つ年上の真行氏と再会し、縁あって1972年1月に結婚する運びとなった。田窪氏が23歳のときのことである。

（次号につづく）

